

サツルースティウスの

『カティリーーナ陰謀記』

——古典ラテン語散文による歴史文学の起源——

水野有庸

II I	古代ローマにおける歴史文学の特質とその発祥とについて……………	一四五
	サッルースティウス『カティリーナ陰謀記』(本邦初訳)……………	一五五

## I 古代ローマにおける歴史文学の特質とその発祥とについて

### 一

歴史文学とは、西洋古典世界では、どのような性質の文学であったのだろうか。一世紀末に公刊されたクインティリアヌス *Quintilianus* の『弁論家養成法 *Institutio oratoria*』の有名な巻のなかに(10、1、31-32)、弁論術と関連させてではあるが、その基本性格について以下のような明快な説明がみられる――

「歴史書もまた、なにか美味な果汁のようなものを豊富に含んでいるので、弁論家を育てるのに役立つこともある。けれども、歴史書でもやはり、これを読むばあい忘れられてはならぬことがある。それは、そこで發揮されている高度な腕前の多くは、弁論家が用いてはならないものだ、という点である。つまり、歴史書は詩人らの作品に酷似していて、韻律のない歌だ、とも言えるようなところがある。さらに、修史の目的は語りものを作ることにあるのであって、事実の立証にあるのではない。歴史作品の全篇は、事件の弁護や現実の法廷論争などとは関係がない。その編纂がなされるのは、その著者が、後世に自分の才能の名声をながく残したい、と望むからである。だからまた、日頃はあまり使用されない言葉とか、かなり奔放な文彩などを用いて、物語が退屈にならぬように工夫される。

そういう次第で、さきにも述べたことであるが、サルルステイウスの簡潔な表現は、閑暇を楽しんでいる人の耳にも、学識を磨いた人の耳にも、最高度に絶妙なものではあるけれども、そのような文体をわれわれは裁判官のまねで振りまわしてはいけない。裁判官は、さまざまの思案すべきことに追われているし、それに、学識の乏しい人が裁

判官になっていることも多いからである。同様に、リーウィウス Livius が乳のように甘くて言葉を豊富に連らねた文章を書いたのは有名であるが、この種の文体も、叙述の華麗さを眼中に置かずに、信用を得ることだけを志しているような者にとっては、とうてい、模範とはならぬだろう」

記述の正確と客観性とを歴史書の生命と考えがちな現代のわれわれにとって、クインティリアヌスのこのような言葉には、異様に響くところがあるかもしれない。けれども散文による歴史文学が文芸の高度に技巧的なひとつのジャンルをなすという見かたは、古代盛期には、単なる常識に近いものでさえあった。そして、このラテン文学の盛期、つまりキケローが弁論活動を始めた前80年ころからの約三世紀間の時代に、そのような常識を確立した最初の人こそ、われわれのガイウス・サッルースティウス・クリスプス Gaius Sallustius Crispus だったのである。それが古代からの定説であったことは、タキトゥス Tacitus の『年代記 *Annales*』(3, 36)にみえるサッルースティウスへの簡明な賛辞に照らしても、一世紀の高名な寸鉄詩人マールティアーリス Martialis の

聞くがよい、学者がたからご評価を——

クリスプスこそラテン史家らの嘴矢なりとの

という詩句(14, 191)をみても、確実である。

もちろん、サッルースティウスの処女作、つまり、ここにその前半を訳出した『カティリーナ陰謀記』が公刊されたと推定される前43年ころ以前にも、美しい散文による一種の歴史書はあった。その作品の断片だけが現存する前二世紀の大カトーや前一世紀前半のセンナなどは別として、サッルースティウスの僅か十年前後まに、洗練の極致をつくしたカエサル Caesar の『ガリア戦記 *De bello Gallico*』が出ついたのである。「まったくすばらしい。直立

した美しい人体の裸像のようだ。いっさいの文飾を衣服のように脱ぎ捨てているけれど」と言つて、キケローは、一種の文学史である自作の『ブルートゥス *Brutus*』という著作のなかで(75、262)、カエサルがこの作品に絶賛を惜しまなかつた。けれども、さすがにキケローである。「文章の、純度の高い明快な簡潔」(同所)が歴史書の身上であることを指摘して、カエサルの作品が史書のこの理想にある意味で到達していることは認めながら、カエサルの意図が歴史叙述を志す者に材料を提供することにとどまっていた点を、キケローは見逃していない。『ガリア戦記』はカエサルが自分の偉業を簡明に記した「覚え書き *commentarii*」にすぎなかつたのである。つまり、厳密な意味では史書ではなかつた。たしかに、キケローは文学のジャンルの区分について厳重であつた。

だから、この意味でカエサルを除外するとき、前一世紀なかばの時点では、古拙でないラテン散文による歴史書は、まだ現れていなかつたというべきである。歴史文学にかんするキケローの考えかたは、おもに、ヘーロドトス以下のギリシア語史書についての造詣から得られたものとみてよい。けれども、あたかもこの時期に、ラテン語による本来の意味での歴史書の出現を待望する空気が、ようやく強まっていたのも事実である。ふたたびキケローに目をむけると、ルッケイユス *Luceius* という文才ある友人に、キケローは自分の功業についての史書の執筆を依頼する丁重な長い手紙を送っている(キケロー『親しい人達への手紙』5、12)。キケローに親しい人たちのあいだでも、キケローに歴史書の著述をさせてみたいという熱望のようなものがあったことが、キケロー自身の作品から知られる(『法律について』1、2、5)。キケローは、その大仕事に必要な閑暇がないことを口実にして、その希望を謝絶する(同書1、3、9)。けれども、この謝絶は、筆者がひそかに見るところでは、結果的にはラテン文学の歴史のために、むしろ幸いであつたと考えるべきであらう。キケローは、所詮、生来の弁論家であつた。その歴史文学論においては前述のよう

に正鶴を得たキケローであったけれども、実際に当人が歴史を書いたとしたら、『古代芸術散文 *Anike Kunstprosa*』の著者ノルデンも指摘したように(201ページ)、簡潔のかわりに「饒舌ぶりを發揮したことであろう。」われわれが持っている成熟期のラテン歴史文学の芸術効果は、キケローの雄弁のそれとは相当に異質なのである。長いめの文章によってではあるが、事件の壮絶な連続を、陣太鼓の音に似たりリズムで緊迫感を煽りながら物語るリーウィウス。意識的に圧縮された文章を駆使して、どす黒さと厳しさを不気味にただよわせていることを一つの共通点とするサッルステイウスとタキトゥス。どれもみな、古典ラテン語という大きな共通の枠の中にありはしても、種々の面でキケローには見られなかった文体の創始者であった。——ここで注意すべきは、前44年のカエサル横死からその養子による帝政樹立までの十数年間に、「金の時代」のラテン文学の全体が質的に変化発展したという事実であらう。

## 二

この変化の先陣を承るサッルステイウスは、クインティリアーヌスの前掲文も暗示しているように、歴史叙述にあたって史実自体の追跡によりも、文学の独自な様式を作りあげること生命を賭けたようである。焦点は文事そのものであったと思われる。けれども筆者としては、サッルステイウスが生命を賭けたその文体の特色を細部にわたって詳述することは、それが専門的でありすぎる作業となることを考え、さらに後述のような積極的な理由もあって、このたびは差し控える。ここでは、その作業の準備を兼ねて、やや外面的なことにわたりながら、この作家の素材の扱いかたにみられる特色の一部に注意して、二点についての簡単な論考を試みるにとどめたい。課題の一つは、サッルステイウスが史実にあまり忠実でない点を具体的に例示して、その一見なおざりな態度が意味するところに、一

応の解釈をつけることである。第二の課題は、文学界の巨大な先人キケローの言行がどう扱われているかに、一瞥を加えることである。キケローにたいする基本態度の一端を、語法自体とは別の面からも見ておく必要がある。

第二の点から始めよう。マールクス・トゥッリウス・キケロー *Marcus Tullius Cicero* が政治家としての最高の栄位に達したのは、かれが執政官職についてカティリーナの陰謀を鎮圧した前63年である。その後のキケローは、むしろ不遇であった。けれどもその不遇な時代に、著作や演説のたびごとに、63年の自分の救国者としての偉業を自賛する。ところがサッルースティウスは、63年のキケローを美事に翻弄する。「この時点でのローマの政治的統制力は、私の知るかぎり、惨憺きわまりないものはなかったのだ」(第36章)。これは、直接にはローマの民心の腐敗を語る箇所での言葉ではあるけれども、ここで政治的統制力と訳しておいた原語 *imperium* は、同時に、執政官キケローが持っていた政治・軍事の権力を暗に指している。また、キケローが周到な情報網を張って陰謀の動きの内偵に成功していたことは、事実とみてよい。「私はその事実の確証を握ったのだ *comperi*」という文句をキケローは演説で繰り返した。サッルースティウスは言う。「敵の勢力などについて」キケローは、十分なだけの確証を握ってはいなかった *neque……satis comperitum habebat*」(第29章)。また、キケローの名を特に高めたのは例の有名人『カティリーナ弾劾演説』である。知力に溢れた沈着冷静な弁論家キケローの雄姿を偲ばせる演説である。ところが、サッルースティウスは書いている。「すると、執政官のマールクス・トゥッリウスは、カティリーナが目の前に来たことに恐怖を覚えたためであろうか、あるいは、怒りに逆上したためであろうか、ともかく、目もさめるように美事で、いちじるしく国家のためになるような演説をおこなった」(第31章)。まるで、上げたり下げたり、である。——ちなみに、反対語を対比的に活用して読者の心をあわただしくゆさぶる手法は、サッルースティウスの得意であった。——それ

ばかりではなかった。キケローのこの演説の冒頭の「いったいいつまで、カティリーナおまえは、われわれの忍耐に付け込む気なのか？」という名文句を、サッルスティウスは振<sup>も</sup>つて、叛徒の首領カティリーナに、その部下への煽動演説のなかで、こう言わせている。「勇敢このうえない諸君！ こういう状態を、いったいいつまで忍耐するつもりなのか？」(第20章) そして、キケローの名演説は、以上の二箇所以上のように簡単にあしらわれている以外は、まったく無視されている。それに反して、このたびは収録を差し控えたこの作品の後半を飾っているのは、捕えられた一部の叛徒の処刑をめぐっての、カエサルと小カトーとの、相反する立場からの興味深い演説なのである。——サッルスティウスの反キケロー主義が多角的で根深いものであったことは、以上からも推察されることができよう。

つぎに、サッルスティウスによる史実の正確な記述について、まず具体的な一例を挙げる。叛徒がラエカの家で深夜に密会して翌朝キケロー邸の襲撃を試みたのは(第27~28章)、十一月六日の夜から七日の朝にかけての事件であったことが、前記のキケローの演説から明らかである(1、4、8~1、4、10)。この演説が事件の僅か三、四十時間後の十一月八日に元老院で国家の最高責任者によっておこなわれたのである以上、この日付については疑いの余地はない。さらに、「元老院の至上決議 *senatus consultum ultimum*」はその十数日前にくだされて、ローマでは戒厳令が布かれていた。キケローの処置は敏速だったのである。ところがサッルスティウスは、キケローが、自宅が襲撃されたことその他のために、不安におびえて事態を元老院に報告した結果、戒厳令が布告されたかのように書いている(第29章)。そして、キケローのカティリーナ弾劾の第一回演説はキケロー邸襲撃事件の少くとも数日後におこなわれたことになっている。出来事の前後関係がこのように変えられるにいたったのは、キケローを卑小化するためであったか？ 資料の検討が不十分であったためか？ 物語りを進めるうえでの便法のためであったか？ どの



可能性を認めても、答は不完全なのである。われわれは、サッルースティウスのこの史書がこのまゝで、十分面白く読めるという確実な一点に、注意しなければならぬ。史実の細部は誤っていても、全篇は迫力に満ちて、叙述はいかにも真実にみえている。史実を知っている読者は、表面に現れた事件などは歴史ではない、とサッルースティウスが無言で主張しているのを、このあたりの箇所から直ちに読み取るはずである。つまり、事件の背後にある社会の風潮、人物の性格、行動の動機などのほうこそ、サッルースティウスにとっては真の歴史そのものだったのである。そして、そういう深層の本質を鋭く抉り出し、その真価を表面化した具体的事実によってできるだけ生き生きと描きあげるこゝとが、歴史家の仕事だったのである。風儀や道徳にかんする含蓄ある用語が頻繁に用いられて、全篇から独特の凄みを感じられるのも、作者のこのような着眼の結果とみられる。——サッルースティウスが「私は、可能なかぎり真実を忠実に追いつながら、述べよう」という言葉によって、二度も(第4章、第18章)読者に与えている約束は、まさにこの意味において果されている。ここからは、タキトゥスの史書にたえられた深みまで、距離はもう長くない。

### 三

さらに、前述のようなキケローにたいするサッルースティウスの反感に、その非キケロー風の文体がいかにも似つかわしく呼応して、キケローの死の直後、ここに新しい種類の文学が開拓されつつある、という強い印象をわれわれは受ける。その文体のおよその模様を抽象的に略述すると、キケローの整った読みやすい文章と競うためには、たとえば、古語を、少くとも古風な語形を、使用したり、一語の中に多くの含みを強引に盛りこんだり、キケローらによって接続法の使用が常識化されるにいたっていた或る種の構文中に直説法を交じえたり、その他、さまざまの工夫を

凝らして、あくの強い、捻りを利かせた、いかにも個性強烈な文章を作りあげねばならなかった。（わが国でも、歴史的不定法の頻用にサッルースティウスの文体の特色を見ようとする論文が、最近発表されている）そして、そういう非キケロー風の文章は、同時にまた、結果的には、サッルースティウスがその前半生の政治生活で多大の恩顧をうけたカエサルでの、透明な文章構成の原則からも、多くの面で遠ざかったものになってきている。要するに、共和制末期からカエサル独裁の時代にかけての三十数年のあいだに確立された文章の様式に種々のかたちで対立するような、なにか鬼子のような文体が生まれたのである。——この種の文体こそ古典歴史散文の主要特質の一つと言えよう。

だから、反響は当然ながら大きかった。サッルースティウスの同時代の有力な文人から「サッルースティウスにみられるような、晦澁と、言いまわしの大胆さとは、避けるべきだ」という批判が出たことも、諷けることである（スエートーニウス『文学者伝』10）。さらに、「サッルースティウスは、その生涯をみてもその著作をみても、怪物じみていて、なんらの造詣もないまま、大カトーをはじめとする古人の言葉を剽窃している」という悪意に満ちた批評さえ出た（同書15）。ついでながら、「あのとおり真面目で厳肅な文章を書き、風紀監察官を思わせるような史書を作ったガイーウス・サッルースティウスは、密通の現場をアンニウス・ミローによって取り押さえられて、存分に鞭打たれ、さらに金を払ったうえで放免された」という驚くべき記録を、『アッティカの夜』の著者ゲッリウスは伝えている（17、18）。もちろん、他方には異常な称賛の声もあった。同じゲッリウスの別の箇所では（3、1、6）、二世紀初頭のローマの高名な哲学者ファウオーリヌスが、この『カティリーナ陰謀記』を友人に朗読させながら、作者のサッルースティウスのことを「この人は、簡潔というものの極意をきわめた達人で……」と説明している様子を描かれている。さらに、「われわれの歴史文学は、ギリシア人のそれに負けていなかったようだ。じじつ、私は、た

めらうことなく、トゥーキューデイデースにはサッルースティウスを匹敵させよう」といったのは、やはりクインティリアヌスである（前掲書10、1、101）。その少しあとに（102）、「神わざのような、あの、サッルースティウスの文章の運びの早さ」という言葉さえみえる……。

#### 四

以上のように、古典ラテン語の世界にみずから生きていた古代一流の教養人たちがさえも種々の批評をしているとおり、サッルースティウスの原文には、良きにつけ悪しきにつけ異色の難渋さがある。しかも、「この作家が文章の彫琢に」苦心した形跡は、その作品を読むだけでも、じつに明瞭に看取できる。この苦勞は、ウエルギリウスが一日にごく僅かの詩行しか作らなかつたという事実とも通じるところがある——炯眼なクインティリアヌスはそう睨んだ（前掲書10、3、8）。そして、サッルースティウスが筆者を惹きつけたのも、まさにこのように苦心して練られた文章の奥にひそむ技巧の秘密を解き明かしたい、と思つたからである。しかし、その文体について論じるだけでは、サッルースティウスの生命は十分には網にかからない。原文の芸術性を日本語に可能なかぎり再現してみる苦勞を重ねなければ、この作家の魂を肌で感じることができない。筆者は自分の努力の不足を承知で、そう信じた。わが国でまだあまり知られていない古典の秀作を広く公開することにも意義を認めた。論文を本旨とするこの研究年報に、いわゆる翻訳を中心部分とする原稿を提出したおまな理由はこれである。したがって、原作の後半部の定訳も、機会をみて発表する予定である。——なお、このたびの拙訳について一点だけ付言することが許されるなら、当然のことながら、原文の晦澁さは可能なかぎり避けて、平明な日本語で原文を伝えることが、なによりも必要であると筆者は信じ

た。けれども同時に、原文の意識的に工夫された一種の生硬を、なんらかのかたちで訳文中に潜ませる必要も、筆者はたえず痛感した。全体としてはよくわかるが、どこか変な感じがする、と思わせるような訳文が、この作家のばあにかぎり理想のようである。少なくとも、キケロー調の流麗さは、ここではあまり望ましくない。

以下の訳出にあたっては、Alfred Ernoutが校訂したBudé版のテキストを使用した。ラテン語の最高権威の一人であるこの校訂者に、その種々の名著を通じて、筆者が深い尊敬を寄せているからである。ただ、まれに、Jacobs-Wirz-Kurfessが注釈をつけて Weidmann 出版社から出したテキストと、Merivale による Macmillan 出版社からのテキストとの読みを採用した箇所がある。この例外的な箇所では、その旨を付注によって注意した。なお、テキストの読みにかんする以上のような注のほかには、普通の意味での解説的な注は、いっさい付けなかった。原作が読んで楽しむべき一種のロマンである以上、紙面から可能なかぎり夾雑物を除きたいと思ったからである。

## II サッルースティウス『カティリーナ陰謀記』（本邦初訳）

### 一

われこそは、ほかの動物どもの水準を越えたものでありたい——こう切望している人間はだれでも、畜類同然に無名のまままで一生を過ごしてしまうことがないように、渾身の力をふるって努力すべきなのだ。畜類というものは、生まれつき、大地に腹ばって口腹の欲に盲従するようにできているだけなのだ。それに反して、われわれのほうでは、全体的にみれば、精神と肉体とが人間性の基礎をなしているが、ことに精神のほうのおかげで、人間は自他の支配

者となることもできるのだ。肉体のほうに従うなら、逆に奴隷のような姿になる。要するに、人間は、一面では神々と、他面では畜生どもと、同じものをそなえているのだ。

そうであればこそ、私は、自分のつぎのような見解が正しい、という確信を深めたのだ。つまり、私の考えでは、一身の誉れを求める以上は、頼みとすべきものは腕力よりも才能なのだ。それから、われわれの肉体に授けられている生命は、それだけでは短いのだから、後世にわれわれの名をできるだけ長く残すようにすべきなのだ。いや、考えてみよ。富と容姿とによる誉れは、流れ去るもの、脆いものにすぎぬ。ところが、精神の優秀な力は、われわれの輝かしい持ちもの、不朽の持ちものとなるのだ。

もちろん、軍事の進歩が、身体の蛮力にもとづいているのか、それとも、精神の優秀さにもとづいているのか、という問題については、人間どものあいだで昔から見解の大きな相違があった。これも当然なことだ、行動を始めたかと思えば熟慮があらかじめ必要であると同時に、他方では、熟慮によって心がきまると、さっそく行動する必要もあるのだ。つまり、どちらの要素も、単独では不十分なのだから、相互に補いあわなければならぬ、という面もある……。

## 二

さてそれでは、権力の座を示すもっとも古い名称が地上では「王」であったことに注意しながら話すことにすると、原初の時代の各地の王たちは、その基本方針の相違にもとづいて、二種類に大別される。つまり、一方は身体を、他方の王たちは才能を、磨いていた。もちろん、そのころはまだ、貪欲を知らぬ人生が営まれていた。各人は自分の持

ちものだけで満足していたのだ。

ところが、アジアではキュロス王が、ギリシアではスパルタとアテナイの両国が、よその都市や蕃族をつぎつぎに征服したのが、新たな転機となった。自分の支配欲を開戦の正当な根拠とする見かたも、軍事上の支配力が大きいほど、得られる誉れは大きいのだ、という考えかたも、このときに始まった。このような時代を迎えてようやく、危険と労苦を通じて人類が発見したのは、才能こそ戦争での最強の武器だ、という思想であった。

それにしても、王をはじめとする権力者たちが、平時にも戦時と同様に精神の優秀な力を發揮し続けているとしたら、人間の世界は現状以上に公正で安定した状態にあるはずなのだ。そして、統制の壊滅という醜態も、全面にわたる変転と混乱の様相も、見うけられないはずなのだ。まことに、権力の座というものは、その創業のときに用いられたのと同じ手段によってこそ、楽に維持できるのだ。ところが、努力にかわって怠惰が、自制と公正とにかわって放恣と驕慢とが、はびこるようになるやいなや、政治情勢のほうも、風習に呼応した変化をうけていく。だから、権力の座は、劣った者の手からその時代の最優秀者の手へ移るのが、つねのならないのだ。

そればかりか、人間どもが手がけている耕作術、航海術、建築術などのどれ一つをみても、それらを自由に操りうる王者は、精神の優秀な力だけなのだ。

だというのに、昔から大衆というものは、飲食と惰眠に耽るだけで、学問も嗜みも身につけることなく、放浪者同然の人生を過ごしてきたのだ。しかもこの連中は、すっかり倒錯に陥ってしまって、身体は心地よいものだが知的活動力は重荷だ、と感じてきたのだ。こんなやつらなら、生きていようが死のうが、大差はない、と私は考えている。げんに、その生死についての記録はどこにある？

それに反して、だれがなんと言おうと、「この人こそ生きてゐる！ この人こそ生命を燃焼させてゐる！」——私の目にそう映る人とは、ごくのある仕事に没頭していて、「めざましい仕事をやりあげた男だ。見あげた腕前の男だ」と評判されるようになるための努力をしている者、まさにそういう人物なのだ。

### 三

もちろん、仕事の分野が山ほどある以上、人間がそれぞれ自分に適した進路を見いだすようになるのも、自然ななりゆぎなのだ。

だから、行動によって国家のために尽力するのも、すばらしいことにはちがいない。けれどもまた、名文によって国家につくすのも、まんざら見下げるべきことではないだろう。名を揚げる機会が得られるのは、戦争のときだけではないのだ。平和なときでも、望む者にはその手段がある。たしかに、行動した者だけではなくて、他人の行動を筆で描いた者も、おおぜい称賛をうけているのだ。もちろん、歴史そのものの推進者にくらべれば、史家が手に入れる誉れは、もののかずではないかもしれぬ。けれどもやはり、私としては、歴史の動き自体を筆で描くという仕事は格別に厄介な難業なのだ、と考えずにはいられない。その理由は二つある。まず、史家の筆は、事実が持つ迫力をそこなうようなことがあってはならぬ。それからつぎに、ひとの不屈きを悪く書くと、それを、筆者が抱く憎悪や恨みから出た言葉である、とみる人が、案外多いものなのだ。ところが逆に、すぐれた人物の誉れ高い偉大な長所などの話をする時、だれにも実行が容易だとみられる程度のことなら、読者は、かくべつ驚いたりせず、それを事実と認めてくれるけれども、その程度以上の域に話が及ぶと、根拠はあるにしても全体としては作り話だ、と読者は考える

ものなのだ。

そこで、こんどは自分のことを言わせてもらうと、私も、最初、若年のころは、大多数の者と同じように、熱意に燃えて政界へ進んだ。けれども、そこでは、思いのままにならぬ辛い目を私はいろいろと味わったのだ。それは、慎みにかわって厚顔が、無欲にかわって貪欲が、能力による拔擢にかわって賄賂による獵官が、根強い風潮になっていたからだ。もちろん、こういう悪弊に馴染めなかった私の精神はこの風潮に反撥を感じてはいた。けれども、横行する悪徳に囲まれていては、私のひ弱な青春は、虚栄心による墮落をとうてい免れることができなかった。そればかりか、私は、世間の悪習に同調していたわけではないけれども、官位の追求に夢中であつたために、他の連中と同じく、悪名を立てられ怨恨を買って、苦痛の日々を送っていたのだ。

#### 四

ところがついに、危険の多い惨めな稼業のあげくに、私の精神は安らぎを得ることになったのだ。そして、以後は政界から遠のいて余生を終えるのがよい、と私は断定するにいたつたのだ。けれども、そのとき私には深く期するところがあつた。まず、「思考をやめてくだら」と貴重な閑暇をつぶすようなことはしたくない。だからまた、耕作とか狩猟のような、奴隸のやるべき仕事に従事して生涯を送るのは、「ご免だ」——私はそう心にきめたのだ。そればかりではなかつた。あの忌まわしい野望のおかげで自分が長く怠つていた意中の仕事にふたたび取り組んで、わがローマの歴史のなかの、後世に伝えるに値すると思えられるいくつかの事件を、それぞれ一卷にまとめて詳述しよう——これこそ私の決意なのであつた。しかも、自分の心が政界にたいして期待も恐怖も党派心も抱かずにすむようになつ



たいま、私のこの決意は、それだけ強固になってきたのだ。

以上のような次第で、私は、まずカティリーナ陰謀事件について、可能なかぎり真実を忠実に追いながら、簡明な一書を書きあげてみたいと思う。というのも、筆者の見るところ、この事件は、未曾有の危険な犯行であったという意味で、特別、注目に値するからなのだ。

さて、事件そのものの叙述にはいるまえに、その中心人物の性格について、すこし説明を加える必要がある。

## 五

由緒ある一門に生まれたル・キウス・カティリーナは、氣力にも体力にも恵まれていたが、その心根は悪質であり歪んでいた。だから、若年のころから、内戦や殺人や略奪や市民のあいだの不和を喜んだ。さらに少壮期になると、そういう面で腕を磨いた。そのさい、断食や不眠や寒氣にたいするその身体の耐久力は、常識で考えられる限度を越えていた。その氣質は不敵であり狡猾であり移り気であり、なにをしたときでも、なにをしなかったときでも、事実の反対を巧みに装うことができた。他人のものをむやみに欲しがり、自分のものは浪費するくせがあった。種々の欲望をいつも火のように燃やしていた。申しぶんのない口舌の持ち主であったが、英知のほうは欠けていた。

ともかく、この怪物じみた胸のなかでは、途方もないこと、信じられぬようなこと、大それたことをやりたいという熱望が、いつも渦巻いていたのだった。

だから、ルーキウス・スッラによる独裁の時代が過ぎると、わが国家を乗っ取りたいという不埒な欲望に、この男は、はげしく取りつかれたのだ。(もちろん、暴力による独裁権の入手だけを狙っていた以上、そういう目的を達成

する方法の細部などは、そのさい、なんら深慮を要する問題とはならなかった。）同時に、その胸のうちは、一方では、家産が底をついてくるにつれ、他方では、自分が重ねている悪事を思うにつれ、苦しみのあまり、日ごとに狂暴になっていくのであった。しかし、この悩みのたねは両方とも、あの前述のような悪弊に当人が染まることによって、大きくなっていったのだった。それだけではなかった。この狂暴化に、全市民の墮落した習俗が拍車をかけた。じじつ、このうえなく有害な両極端の悪徳である浪費と貪欲とが、全市民を毒しまくっていたのだった。

こうして、話はわが市民の習俗に目を向けるべきところへ来たので、私は、問題そのものの要求に従って、ものごとの由来を回顧してみるべきだろう。つまり、平時と戦時における祖先の慣習、わが国家を築きあげた祖先の精神、祖先が残してくれた国家の壮大さ、このうえなく美事であったわが国家が徐々に変質して、このうえなく劣悪で破廉恥なものとなってきた経過——などについて、私は手短かに論じなければならぬだろう。

\* Ernout が補っている *arque optima* を省く。

## 六

私が聞いたかぎりでは、ローマの都を建設して、はじめてそこに住みついたのは、トロイア人たち、つまり、定住の地を求めて流浪中の、アエネーアースをいたたく落人たちであった。この連中にイタリア原住民が加わった。こちらには未開の人種であり、法律も統治機関も持たず、自由な、無拘束の状態にあった。これら二つの集団は、仲間となるには不似合いな種族であり、類似していない言語を用い、それぞれ別の習慣に従って生活していた。それにもかかわらず、両者がひとたび同じ城壁のなかへ集まると、その融合は、説明しても信じられぬほど、じつに楽々と実現し

た。こうして、散在していた民衆と流浪の民とは、協調によって、すみやかに一国を作りあげた。

けれども、こうしてできた国が、人口と領土を増し、民度を高めてきたとき、そして、繁栄を誇る強国であることが目につくようになってきたとき、人間の世界のならいにもれず、この国も、富強のゆえに嫉妬をうける時期を迎えた。かくて、近隣のいくつもの王国が戦争をしかけてくる。援助してくれる友好国はすくない。ほとんどの友好国は、恐怖のために度を失って、危地を避けていたからである。それでも、ローマ人は、戦場で、あるいは後方地帯で、力をふりしぼって作業を急ぐ。戦備をかためる。たがいに励ましあう。敵軍を迎えうつ。自由と、父祖伝来の祖国とを、武器で守り抜く。やがて、武勇のちからで危険を払いのけてしまうと、ローマ人は、同盟国と友好国とに援助を施すようになった。つまり、恩恵を受けるよりは与えることによって、友好関係を築くようになったのだ。

そのころのローマでは、国家権力の名称は「王権」ではあったが、この権力は法の支配下にあった。だから、身体は老齢のために弱っているが、英知を身につけて天性を活動させている人々が、特に選出されて、国家のために心を砕いていたのだ。この人々に「父」という称号が与えられたのは、その年齢のゆえか？ あるいは、家庭でのばいと責務が類似しているゆえか？

さて、この王権は、最初は、自由を守り国勢を伸展させるのに役立つていたが、やがて、それが傲慢な独裁権へ転化した。そこで、ローマ人は政体を変えて、年間だけ政権を握る毎年二名の最高権力者を据えることにしたのだ。放縦ほうしよくによって人間が慢心することは、こうすればぜったい不可能になる、というのが、その変革の趣旨であった。

## 七

それはともかく、この時分になると、人々はみなこぞって自尊心を抱きはじめた。そして、才能を以前よりは顕示しはじめた。ところが、王というものは、劣った者よりも優れた者に嫌疑の目をむけ、いつの時代にも、他人の優秀さに脅威を覚えるやからなのだ。けれども、いまや共和制が実現されたために、国力の強大化が、説明しても信じられぬほど、じつに短い期間のうちに進んでいった。するとたちまち、誉れを得たいという欲求が人心をとらえた。

もちろん、そのずっと前の時代から、ローマの壮丁は、兵役に耐える年ごろになるやいなや、戦場で労苦の経験を積むことによって軍務を覚えるのが普通であった\*。それがいまや、きらびやかな、武器や軍馬をはげしく所望するようになってきたのだ。遊び女や宴会には目もくれなかったことであろう。だからまた、こういう気性の人々は、労苦をあたりまえのことと思つた。どんな土地でも辛いとは思わず、険しいとも思わなかった。武装した敵にも恐怖を感じなかつた。武勇のまえには、万事はものかずでないありさまであった。もちろん、この人たちのあいだでも、功名を求めればげしい競争がおこなわれた。つまり、「敵兵を切り倒そう。敵の城壁によじのぼろう。そういういざおを立てているところを、みなから注視されるようにしよう」と思つて、だれもみな先陣を争つた。そういういざおこそ富なのだ、それがすばらしい名声であり偉大な品位なのだ、と、みなは信じていたのだ。みなは、称賛を得ることに貪婪<sup>どんらん</sup>であり、金銭には鷹揚であつた。誉れを拔群なものにしたい、財産を清潔なものにしたい、と、みなは願つていたのでつた。

——私は、本書の論述がそのために不要な脱線を強いられることになりさえしなければ、敵の優勢な軍勢をローマ

人が寡勢をもって敗走させた戦場の名や、ローマ人が攻め取った要害堅固な都市の名を、いろいろ挙げてみせることもできよう。

\* *Mervale* に従つて *per laboris usum militiam discebat* と読む。

## 八

それはそうと、なにごとにつけても暴君のように振舞うのが、じっさい、運命の女神なのだ。この女神は、ありとあらゆるものを、事実のままにはなくて、自分の気まぐれのままに、顕彰したり隠蔽したりするので。

たとえば、アテーナイ人が立てた偉業は、なかなか輝かしくて壮大なものではあったけれども、私のひそかな評価を述べてみると、伝えられているようなアテーナイ人の声価は、かなり割引きされる必要がある。つまり、非常に才能のある作家がアテーナイで輩出したために、アテーナイ人の業績がきわめて偉大なようにみられて、世界中で顕彰されるようになったにすぎないのだ。だから、そういう業績をあげた人々に備わるとされている優秀さは、たんに、その賞揚に發揮された文筆上の高度な才能の所産なのだ、といつてよい。

ところが、ローマ人のほうは、こういう賞揚の手段をまったく知らなかった。ローマでは、最高の知者はすべて、実務に多忙をきわめていたからである。身体を遊ばせて才能だけを活動させるような者は、ひとりもいなかったのだ。最優秀者はすべて、文筆よりも行動のほうを好んだ。だから、自分の勲功が他人から称賛されることは我慢したが、すすんで他人の勲功を物語ることは、もう、優秀な人の性に合わなかった。

## 九

ところで、さきに述べたように、平時にも戦時にも、良俗が磨かれていた。協調の精神が満ち、貪欲などはどこにもみられなかった。ローマ人は、法に強いられてではなく自主的に、正義と国益のために身命をなげうった。誹謗の、不和の、抗争の鋒先は外敵であった。そして、国内では、たがいに美德を競いあったのだ。神々への奉納は盛大におこない、私生活はつましくし、交友の面では信義を重んじた。そして、二つの気風をむねとしながら、つまり、戦時には勇猛を、平和が訪れたら公正を、むねとしながら、私事にも公事にも当たっていたのだ。

こういう風潮の端的な見本として一二の事実をここで挙げてみると、まず戦時には、命令に反して敵を攻撃した者や、後退命令を受けていながら戦場から離脱するのが遅すぎた者のほうが、軍旗を捨てたり、苦戦のあまり持ち場を離れたりした不心得なや、からよりも、懲罰を受けることが多かったのだ。それから平時には、政治権力は、恐怖を手段としてではなく恩情をこめて、行使されたのだ。また、ひとから害を加えられたときでも、復讐よりは寛恕するほうを選ぶのが、ならわしであった。

## 十

けれども、労苦と正義のおかげで強大になったわが国家が、各地で大王どもを恭順させ、未開な種族や巨大な国民を武力で屈服し、ローマの覇権を妬むカルターゴを根絶し、国外進出の障害を八方の海陸から一掃してしまったそのとき、運命の女神は狂暴になりはじめた。そして万事を混乱させはじめた。労苦を、危機を、成敗の見通しもない

苦境を、それまで楽々と耐え抜いてきた人々が、普通なら望ましいものである泰平と富裕とによって、苦しめられ、おちぶれることになったのだ。

かくて、まず金銭欲が、ついで権力欲が現れた。この二つは、あらゆる悪の温床のようなものになった。たしかに、貪欲は、信義や実直をはじめとするすべての道徳心を破壊するのだ。そして逆に、傲慢を、残忍を、それから、神々をおろそかにする気持や、万事は金次第だという見かたを、教えこむのだ。他方、野望は、多くの人間どもに、うわべを偽ることを強制するものなのだ。つまり、口に出すことと胸中に秘めておくことを、人間どもは区別するようになる。友情にも敵意にも、それ自体のためにはなくて、私欲のためのみ、価値を認めるようになる。考えかたよりも表情のほうを、うろわしくしておくようになる。

こういう傾向は、最初は徐々に進んでいく。ときには懲罰さえも受ける。けれどもやがて、人心の腐敗が疫病のようにはびこってきたとき、国状はついに変質してしまったのだ。かつては正義と美徳との誉れ高いものであった政治権力は、いまや、耐えられぬほど残忍なものになったのだ。

## 十一

けれども、そのはじめのころ人々の心をざかに蝕んでいたのは、貪欲よりも、むしろ野望であった。ところで、野望のほうは、悪徳にはちがいないけれども、じつは、貪欲にくらべれば美徳に近い、というべきなのだ。たしかに、すぐれた人もや、くざのような者と同じように、榮譽や官位や支配権を切望するものなのだ。ただ、すぐれた人は正道を踏みながら励むのにたいして、や、くざのような者は、道徳心を欠いているので、策略と欺瞞を用いてあくせくする、

というところが違うだけなのだ。

ところが他方の貪欲は、金銭にたいする、つまり、賢者がぜったい熱望しないものにたいする、執心のことなのだ。これは、恐ろしい毒液に浸された物質のように作用して、人間の心身の男らしい力を弱めるのだ。貪欲には永久に際限がない。満足を覚えることがない。ものが不足していても充足されても、この心は弱まることがない。

それはともかく、武力で政權を奪ったルーキウス・スッラの政治が、その初期には善政であったのに、やがて悪政となって終りをつけると、いっせいに強奪と掠奪がはじまる。邸宅を欲しがる者があるかと思えば、土地を欲しがる者が現われる。勝利者は、限度も節度も知らぬ。同市民にたいして、卑劣で残忍な犯行をおこなう。

さらに悪いことには、すでにそのまえルーキウス・スッラは、アジアにおける戦争で自分の指揮下にあった軍隊の忠誠心を確保するために、祖先の慣習を無視して、この軍隊に贅沢をさせ、極度の気儘を許したのだ。その結果、明媚な風光や歓楽が帰休兵の猛猛しい気性をすぐに柔げたことは事実である。けれども、ローマの軍隊は、このときはじめて、女と酒との味を覚えるようになったのだ。彫像に、美しく彩色された絵画に、浮彫りの施された什器に、うつつを抜かし、そういうものを私人からも公共からも強奪し、宮居を荒らしまくり、俗間のものはもちろん、聖物までも、ひとつ残らず汚すことを、覚えるようになったのだ。だからまた、こういう兵士どもは、ひとたび戦勝をおさめると、敗北者の手もとには、なにひとつ残らぬようにしたのだった。

いやたしかに、賢者でも、順境のなかに長くいると、道德感覚があやしくなってくるものなのだ。まして、品性を損さなっているこの兵士たちが、勝利に恵まれても自制心を失わずにいるようなことは、あろうはずもないだろう。



## 十二

さて、富が尊重されはじめると、つまり、富に榮譽と権力と勢力とが伴うようになると、美德の輝きは薄れはじめた。そして、貧乏は恥辱になるという見かたや、潔白は他人へのあてつけに等しいのだという変な考えが、広まりはじめた。だからまた、富の弊害として、「浪費」と「貪欲」とが「傲慢」と結びつきながら、少壮期の人々の心を冒すようにもなったのだ。そこで、みなは強奪をする。濫費をする。自分の持ちものはつまらない、と考える。他人のものを欲しがる。はいにかみも慎しみも、宗教上の掟おきても世間での規則も、馬鹿にする。思慮や節度を完全に忘れる。

だから、都会風に堂々と建造された、まどぎの邸宅と山荘とのありさまを知っている人には、敬神の心と人間の分ぶとをかたく守ったわが祖先たちが神々を祀るために造った神殿を訪ねてみるのが、有益であろう。いやたしかに、祖先たちは、神々の宮居を敬虔の念で、自分らの私宅を誉れで、飾っていたのだった。また、打ち負かした敵からも、不正を働こうとする放恣のほかは、なにひとつ奪い取らなかつたものなのだ。ところが逆に、このうえなくやくぎなやからであるさぎの連中は、極悪のかぎりをつくすのだ。つまり、勇敢このうえない昔のかたがたなら勝利を得ても敵に残し与えていたものを、連中は同盟者からも根こそぎ奪取する。権力の行使とは不正を働くことにほかならぬ、という考えかたが、ここにむぎだしに現れているのだ。

## 十三

けれども、こういうことを言葉で述べてみても、なんの役に立とう？ これは、自分で見たことがある人だけしか、

事実だとは信じえないような話だからだ。たとえば、少なからぬ人々が、たんなる私用のために、山々を掘りくずさせて、魚を飼う人工の海を、そこに造成させたのだ\*。私は、こういう連中にとつては富は慰みものにすぎなかったよ。うだ、と思つている。たしかに、心が高貴なかぎりは、富の所有は許されることであつたはずだ。ところが連中は富の醜惡な消費を急いでいたのだ。

そればかりではなかつた。淫蕩や美食への欲望をはじめ、手のこんだ各種の享樂への欲望が、富をめぐる惡徳に劣らず、流行的に人心をとらえていたのだ。男娼が出現する。女は操を金で売る。口を樂しませるために、山海の品々が血眼で探される。眠気を催すまえに床につく。飢えや渴きが、あるいは寒さや疲労が、感じられてくるのを待つようなことはやめて、高級な道楽を求めぬあまり、こういう種々の状態を、みずからの身体のうえに無理に作りあげる。ともかく、こういう風潮こそ、少壮期の人々に、まず家産を失わせ、そのあげく、犯罪へ走らせていく火元となつていたのである。しかも、惡癖が浸みこんだ心が欲望を断ち切ることは、とうてい無理であつた。そして、欲望がつのるだけ心は節度を忘れて、利得と浪費とに手段を選ばず耽つていたので。

\* Merivale に従つて *constructa* と読む。

## 十四

さあ、これほど巨大で、これほど墮落した社会のなかに現れたカティリーナが、ありとあらゆる破廉恥漢や犯罪者を、ちやうど親衛隊のように身边に群らからせるようになったのは、ごく自然ななりゆきであつた。

つまり、淫乱な者や姦通者や美食家で、賭博や食い道楽や女遊びなどのために、親ゆずりの財産を使い果たしたこ

とごとくの連中、破廉恥な行為や犯罪の後始末に困って、莫大な借金をこしらえていた連中、そのほか、各地のさまざまな重罪人や瀆神者で、有罪の判決を受けたり、悪行にたいする法の裁きにおののいたりしていた連中、それからさらに、手を市民の血で濡らしたり、偽証で舌を汚したりして生計を立てていた連中、要するに、不品行や貧窮や罪の意識のために、はげしい胸さわぎを覚えていた連中、——これらが、カティリーナの親密な一党となっていたのだ。

それからまた、咎のない身で、ついカティリーナと親しくなってしまった者でも、毎日つきあいをかさね、誘惑を受けているうちに、いつのまにか、他の連中に遜色がないほどの同類となっていたのだ。

けれども、カティリーナがとくに狙ったのは、青年たちと親交を得ることであった。青年の心は、まだ柔軟であつて、堅牢なところがないために、策略にかかると、簡単に籠絡されていったのだ。つまり、カティリーナは、各人が燃やしている年齢相応の欲望をいちいち見きわめたうえで、ある者には遊び女を周旋してやる。ある者には犬とか馬を買ってやる。その徹底ぶりときたら、連中の服従心と忠誠心とを確保するまでは、出費も惜しまなければ、自分の誇りをもかえりみないほどであった。

また、カティリーナの家に出入りしていた少壮期の人々は、純潔というものを軽視していたらしい、という想像が、世間の一部に広まっていたのも事実のようである。もちろん、その確証を握りえた人がいたからではなくて、いろいろな気配がほかにあつたために、そういう風評が立っていたのだ。

## 十五

そればかりか、ことにカティリーナが、若年のころ、汚らわしい姦淫を重ねた男だったのだ。相手は、貴族の令嬢や、ウェスタ女神に仕える巫女みこなどであった。そのほか、人間の道にも宗教の掟にも反するようなこの種の醜聞を、いろいろと立てたのだ。そしてついには、その美貌以外に、心ある人からとりえを認められたことがなかったアウレリーア・オレスティッラのために、カティリーナは恋のとりこになった。ところが、この女は、成人していた先妻の子を養子とすることに危惧を感じて、カティリーナとの結婚をためらっていた。そこで、カティリーナは、自分の子の息子を殺害して、汚れた結婚のための邪魔者をわが家から取り除いたのだ。これは、本当にあったことだと一般に信じられている。

私は、この事件こそ、カティリーナに犯行を急がせる主要な原因となったようだ、と考える。たしかに、神々にも人間にも敵意を抱いている不潔な心は、寝ても醒めても、安らぎを覚えることができなかった。自分が働いた悪事の記憶は、心のなかにこれほどひどい戦慄をかきおこして、正気のを破壊していったのだ。その結果、カティリーナの顔色には血の気がなくなり、目つきはすさまじくなり、足どりは早くなるかと思うと、また遅くなった。要するに、表情にも態度にも、錯乱の影が漂ってきた。

## 十六

それはそうと、カティリーナは、前述のようなやりかたで誘惑しておいた少壮期の人々に、さまざま手段をつく

して悪事を教えこんでいったのだ。たとえば、証人や遺言封印者などを詐欺のために求めている者があると、こうして手なずけた配下のうちのだれかを、その者のために斡旋してやる。また、「約束を守る心も、ころがりこんだ財産も、訴訟にかけられる危険も、馬鹿にせよ」——カティリーナはいつもそう要求した。やがて配下の者に、世間への体面も慎みの心も失わせてしまうと、さらに大きな要求をつきつけた。つまり、犯行のためのうまい機会がさしたり見つからぬばあいにも、無実な者にむかって、罪人相手のようにして大勢で難癖をつけさせる。そういう者を惨殺させる。これは、遊んでいると腕や悪心が鈍ってくるのをカティリーナが恐れたからであることは、疑いない。だから、実利が得られなくても、残忍な悪人であることを、むしろ望んだのだ。

さて、こういう連中が味方となり同志となってくると確信したカティリーナは、わが国家を覆そうという計画を立てるにいたった。自分が世界中に莫大な借金をこしらえていたことも、その動機となったのはもちろんである。しかし同時に、スツラの配下にあった兵士たちの大部分が、私財を惜しみなく使いはたしたあげく、かつて政敵を倒して強奪をかざねたときの味を思いだして、内戦を熱望していた、という事情も、その計画を促したのだ。

ともかく、イタリア本土に軍隊はいなかった。グナエウス・ポンペイウスは、遠い外地で戦争の遂行にあたっていた。だから、執政官職を狙っていたカティリーナにとっては、見通しは明かるかった。たしかに、元老院には警戒心がまったたく欠けていた。政情は、あらゆる面において、安泰であり平穏であった。けれども、こういう情況こそ、カティリーナにとっては好都合であったのだ。

## 十七

そこで、ルーキウス・カエサルとガイウス・フィゲルスとが執政官であった年の六月一日前後に、カティリーナは、はじめ、仲間に一人ずつ話を持ちかける。そのなんにんかには激励をする。相手によっては、その本心を探ってみる。さらに、自分の実力のほどを、国家に対抗準備が欠けていることを、陰謀に加われば大きな報酬が得られることを、説明する。カティリーナは、自分が知りたいことを、こうして十分に調べあげたうえで、全員を一か所に召集した。これらは、非常な窮境に陥っていて、その心も極度に不敵になっていた連中ばかりであった。

このとき集合した者のうち、元老院階級に属していたのは、プーブリウス・レントゥルス・スーラ、プーブリウス・アウトローニウス、ルーキウス・カッシウス・ロンギヌス、ガイウス・ケテグス、セルウィウスの二人の息子プーブリウス・スッラとセルウィウス・スッラ、ルーキウス・ワルグンティユス、クイントゥス・アンニウス、マルクス・ポルキウス・ラエカ、ルーキウス・ベステシア、クイントゥス・クリウスらであった。そのほか、騎士階級の者では、マルクス・フルウィウス・ノービリオル、ルーキウス・スタティリウス、プーブリウス・ガビーニウス・カピトー、ガイウス・コルネーリウス。

さらに、植民市や自治市からも、それらのまぢでの貴族が、多数集まってきた。そのほか、もうすこしひそやかにこの計画に加担していた貴族も、少くなかった。この連中のばあいには、貧困などの窮境よりも、むしろ支配権にたいする期待心が、加担の動機であった。そのほかさらに、少壮期の人々の大部分は、その家がきわめて高い者であっても、カティリーナの企てに好意を寄せていたのだ。この連中は、あえて事を構えなくても、豪勢な生活とか遊惰

な生活とかを楽しみえたのだ。それにもかかわらず、連中は、確実なものを捨てて不確実なものの方を望んでいた。平和よりも戦争のほうを望んでいた。

また、このころ、世間の一部には、マールクス・リキニウス・クラッスも、この計画をすでに嗅ぎつけている、と信じている者があった。じじつ、クラッスが敵視していたグナエウス・ポンペイウスは、大軍を自分の指揮下に置いていたのだ。だから、一部の人の見かたによれば、ポンペイウスの勢力に対抗できるような実力を養う者なら、どんな者であろうと、クラッスから歓迎されていたのだ。そればかりか、陰謀が成功したばあいには、クラッスは、自分が容易にその一党の首領として納まることができよう、と確信していたらしいのだ。

## 十八

さて、それ以前にも、わが国家にたいする反逆の陰謀が、少数の者によってではあるが、企てられた。そして、その一党の一人がカティリーナであった。だから、私は、可能なかぎり真実を忠実に追いつながら、その陰謀事件について話すことにしよう。

まず、ルーキウス・トゥッルスとマーニウス・レピドゥスとが執政官であった年に、いずれも予定執政官となっていたプブリウス・アウトローニウスとプブリウス・スッラとが、贈賄猟官取締り法によって糾弾され、処罰を受けた。そのすこしあと、カティリーナは、属州における誅求のことで訴えられ、そのために、執政官候補となる希望を断られた。つまり、立候補の届け出でを法定期間内におこなうことは、被告の立場では不可能であったのだ。あたかもそのとき現れたのが、年若い貴族グナエウス・ピーソーであった。ピーソーは、極度に不敵な人物であり、貧窮

に苦しみ、徒党を組むことを好んだ。そして、わが国家の平穩を乱そうという気持を、その窮乏と邪悪な性格とのゆえに、ますますつのらせていた。

さて、カティリーナとアウトローニウスとは、十二月の五日ころ、この人物と示し合わせた。そして、両執政官ルーキウス・コッタとルーキウス・トルクァートゥスとを、翌年の一月一日にカピトリウムの丘で殺すことに、話を決めたのだ。さらに、自分らが最高権力を奪取したら、イスパーニア両属州を占拠させるために、ピーソーを軍隊の指揮官として、そこへ派遣するつもりであった。ところが、この企てが漏れたために、一党は、あらためて暗殺計画を二月五日に延期した。そしてこんどは、両執政官をばかりか、相当数の元老院議員を屠ろうとたくらんでいたのだ。

だから、カティリーナが、元老院議事堂の前で、襲撃の合図を仲間と与えるのが早すぎなかったとしたら、ローマ建都以来もつとも忌まわしい犯行が、当日、実行に移されたことであろう。ところが、武器を手にして集合していた者の人数がまだ多くなかったこと——ただそれだけの原因で、この計画は水泡に帰したのだ。

## 十九

ところでピーソーのほうは、その後、クラッススの尽力で財務官待遇の財務官となつて、内イスパーニアへ派遣された。クラッススが動いたのは、ピーソーがグナエウス・ポンペイウスにたいして激しい敵意を燃やしていることを知っていたからであった。また、元老院のほうも、この属州をピーソーに与えることに難色を示さなかった。たしかに、こういう悪漢を政府の所在地から遠ざけておくことを、元老院は歓迎したのだ。さらに、ピーソーこそポンペイ



ユスの勢力を防ぐとりでになる、と信じていた貴族が少くなかったことも、元老院にそういう考えかたを促した。じつ、グナエウス・ポンペイユスは、すでにこのころ、恐るべき勢力をそなえていたのだ。

ところが、当のピソナーは、自分の属州で進軍していた最中に、その指揮下の軍隊にはいつていたイスパーニア人の騎兵隊によって、殺害された。一部の人の説明によると、これは、ピソナーの統帥法が強圧的であり傲慢であり残忍であって、当の外人部隊はそれに耐ええなかったからだ、というのだ。また、別の説明によると、この騎兵どもはグナエウス・ポンペイユスの古くからの忠実な郎党であって、かれらがピソナーを襲ったのはポンペイユスの差し金による、というのだ。そして、このように説明する人々は、イスパーニア人のあいだでは、この種の犯行の前例が一般にみられないばかりか、かれらは苛酷な統帥にたいする忍従の態度を、すでに何度も示したことがある民族だ、と言つて、自説を裏付けようとす。私としては、この論争に決着をつけることは保留したい。——ともかく、初回の陰謀事件については、これだけ述べておけばよからう。

## 二十

さて、カティリーナは、それまで一人一人を相手に、いろいろな説得を重ねてきたけれども、いまや、全員を一堂に会して激励の言葉をかけるのが効果的であろう、と考えた。そこで、すこしまえに名を挙げた例の連中が集合してきたのを見ると、カティリーナは、自宅内の奥まった場所へ全員を連れこみ、第三者の眼を完全に遠ざけたうえで、つぎのような演説をおこなつた——

「諸君が、みずからの武勇と信義とを私に実証してみせたことがなかったとしたら、せつかく転がってきた好機の

目は、みすみす潰れることになっただろう。独裁権奪取の大きな見通しが、すでにわれわれの手中にあるのに、それもむなしく消えていくことになっただろう。また私としても、臆病者や気まぐれ者だけを頼りに、確実なもののかわりに不確実なものを狙うようなことは、やるはずもなからう。

ところが実際はどうか？ 私は、諸君が、重大な危機に臨んでも勇敢であり、私にたいして忠誠であることを、なれども見きわめることができたのだ。だからこそ、きわめて大きな、きわめて輝かしい冒険に乗りだしてみよう、という勇氣が、私に湧いてきたのだ。さらに、諸君が私と利害関係を同じくする者だ、ということを知って、私はますます心強く思っている。なぜなら、好き嫌いを同じくすることによって、ひとえにそのことによって、友情は堅固なものになるからだ。

さて、私がかくろんでいることは、すでに諸君を一人ずつ呼んで、全員に私が伝えてあるはずだ。それにしても、私の憤怒の炎は日ごとに激しくなっていく。聞け。われわれが自力でわが身を自由な状態にすることができないばあいには、どんな生活状態がわれわれを待っているだろうか。それを私は深く考えているのだ。よいか。わが国家が少数の権力者だけを正当化するような支配体制に陥ってからというものは、大小の君公が進貢するのは、この連中のところだけなのだ。各地の国民や部族が租税を納めるのも、この連中のところだけなのだ。それに反して、われわれのような部外者は、活動家でも紳士でも、貴族でも卑賤な者でも、すべて、勢力を欠き權威を欠いた単なる大衆となってしまったのだ。そして、国家が健全なばあいにはわれわれにたいして恐怖を覚えるはずの連中にたいして、すべての者が隷属しているのだ。

こうして、勢力も権力も地位も富も、この連中か、あるいは、この連中が望む者だけが、独占しているのだ。そし

て、連中がわれわれに恵んでくれるものは、危険だけなのだ。つまり、落選と有罪判決と貧窮とだけなのだ。勇敢このうえない諸君！　こういう状態を、いったいいつまで忍耐するつもりなのか？　どうだ、諸君。他人から傲慢な振舞いのだしにされたあげく、惨めで不名誉な一生に屈辱的なとどめをさされるよりは、男らしく戦場の露と消えるほうが、ましではないか。いや、まことにそのとおりだ！　ああ、これが真理であることを、神々も御照覧あれ。全人類も明察してくれよ！　しかも、勝利はわれわれが握っている。われわれは若さに溢れ、士気も旺盛なのだ。それに反して、われわれの敵は、老年と富とのために、あらゆる面で弱体化している。だから、必要なのは行動の開始だけだ。ほかのことは、そのつど、どうにかなるだろう。

いや、考えてみよ。魚を飼う海を陸上に造成する工事とか、その海への導水路を山中に開き、くする工事などのために浪費されるほどの富が、あの連中のところにはだぶついているのに、われわれの家産は、生活必需品を整えるにも困るほど乏しいのだ。あの連中は、邸宅を増築して軒に軒を連らねているのに、われわれは、最小限の所帯を構えるべき場所さえ、どこにも見つけることができないのだ。——男らしい気性を宿している者なら、だれがこういうありさまに耐えうるだろうか。また、連中は、絵画を、彫像を、浮き彫りの施された什器を買ひあさり、新築したばかりの家を壊して別の家を建てている。要するに、金銭の濫費と散財とのためには、手段を選ばないのだ。それでもなお、はてしない欲望に駆られているこの連中は、自分の富だけで悠然と満足していることができないのだ。ところが、われわれのほうでは、家計も行き詰まり、他人にも借金がたまっている。だから現状は苦しい。しかし、将来ははるかに苛酷なのだ。つまり、うらぶれて生命をつないでいく以外に、どんな道がわれわれに残されているだろうか。だから、いまこそ、諸君に決起してもらわねば！　見ろ、あれを。諸君がいくたびか渴望したあの自由が、くわえ

て、富が、名誉が、栄光が、諸君の目のまえまで来ているのだ。これらはすべて、運命の女神が勝利者に授けてくれる褒賞なのだ。さあ、諸君は、私の演説に動かされてではなく、この現況に、この好機に、諸君を脅している危険と貧窮とに、戦争による素敵な略奪物に、みずから思いを致して、勇を振るってくれるように。私は、諸君の望みとあれば、諸君の最高指揮官にでも、たんなる兵卒にでも、なににでもなるつもりだ。そして、私の全身全霊を諸君のために用立てるつもりだ。私は、諸君の協力によって執政官になったら、以上で打ち明けたとおりの計画を実施できると期待している。もちろん、私に見込み違いがあるとか、諸君が、支配者となることを望まず、むしろ隷属者であることに甘んじているとかいうのなら、はじめから期待もく、そもないのだが……」

## 二十一

さて、そこに列席していた一同にとっては、もともと、悲観的な材料ばかりがふんだんに揃っていて、現状のうちにも将来の見通しのうちにも、明るい要素は皆無であったから、社会の平穩を攪乱してこそ一攫千金の道が開かれると、みなが考えていたのは当然であった。けれどもやはり、カティリーナの以上のような演説をいよいよ聞かされると、大多数の者は、カティリーナに、内乱をどのような具体的条件のもとで進めようと考えているかについて、説明をおこなうように要求した。つまり、「自分らが武器を取ることによって求めうる報酬は、どんなものなのか。自分らが備えているとされている実力と、自分らが抱きうる成算とは、どんな状態を根拠とするどの程度のものなのか」と言っただけなのだ。

カティリーナは、それに答えて、貸借関係の無効宣言、富裕な人々を対象とする財産没収の公示、政務官や神職に

同志を登用する政策、略奪行為の許可、その他、戦争の勝利者が思いのまま手中に収めうるいっさいの利得、などを、まず約束する。ついで、カティリーナは、自分の計画の二人の加担者として、内イスパーニアにはピソが、マウレターニアには軍隊を掌握しているヌケリア出身のブーリウス・シッティウスが、待機していることを指摘する。さらに、つぎのように言う。「執政官選挙に立候補中のガイウス・アントーニウスが自分の同僚になることと期待されるが、この男は、自分と親交があり、しかも、あらゆる面で窮境にあえいでいる。だから、自分は、執政官になって計画の実施に着手するばあい、この男の協力を得ることができよう」

こう言ったうえで、カティリーナはさらに、あらゆる善良な市民を口ぎたなく非難すると同時に、自分の配下には、一人ずつの名を挙げて、称賛の言葉をかけた。そして、ある者にむかつては、当人の貧窮状態のことを、また他の者にむかつては、その者自身の欲求がまだ満たされていないことを、忘れてはならぬぞ、と言って注意した。刑の執行が迫っていることとか、犯罪者の汚名を着せられていることとかについて、注意を喚起された者も少くなかった。スッラが得た勝利を思い起こせ、と言われた者も大勢いた。かつて、その勝利を略奪のきっかけとして利用した連中が、それであった。

カティリーナは、全員の士気があがってきたのを見届けると、自分の選挙運動を支援させるための扇動の言葉を吐いたうえで、この集会を解散した。

## 二十二

ところで、そのころ一部の人が流していた噂によると、カティリーナは、この演説をおこなったあと、計画中の犯

行をやるべき一味に宣誓をおこなわせるにあたって、ブドウ酒を混ぜた人血を大盃に注いで、一座のあいだにそれを回わしたらしい、というのだ。そして、全員が、この誓いを破る者は呪われよ、というような文句を唱えたいえ、宗教上の儀式のばあいの慣例を真似て、この血をつぎつぎにすすつたあと、カティリーナは自分の秘密計画を打ち明けた、というのだ。さらに、カティリーナがこのようなことをやった動機は、これほどの大犯行を関知するにいたった一人一人に、相互にたいする信義感を強めさせよう、ということにあったのだ、と、この噂のぬしたちは強調する。

ところが、ほかの若干の人々が取っていた見かたによると、この種のさまざまな噂は、一部の人々がでっちあげた作り話であった、というのだ。げんに、キケローによって処刑された一味の犯行がものすごかったように仕立てあげれば、事件が終ったあとで生じたキケローにたいする憎悪は、かならず和らいでくる、と思っていた人々が、いることはいはれた。

けれども、以上のような噂の内容は、重要な意味を含んでいる割には、事実による確証がむつかしいようだ、と私は見ている。

## 二十三

それはそうと、当の共謀者の一人がクイントゥス・クリウスであった。この男は、けっして下賤な生まれの者ではなかったけれども、不面目な犯行をかさねていくことによって、そういう世界の中に身を沈めていた。ついには、監察官たちが、この男を、破廉恥な振舞いありとの理由で、元老院から除名したのであった。

ところがまた、この男には、不敵なところがあるとともに、軽卒な一面があった。つまり、聞いたことについても

沈黙を守らず、自分自身がやった犯行でも、それを隠そうとしなかった。要するに、自分の言動について、いつもまったく不注意であった。

さて、このクリウスは、フルウィアという貴族の女性と、長年、不倫な関係が続けていた。しかし、いまや、クリウスは、この女に、いつもほどもて、なくなってきた。窮乏のために、いつもほど気前のよいことがしてやれなくなつたからである。ところが、突然、クリウスは、鼻を高くして、海でも山でも世界中のものを進上しよう、という途方もない約束を、女にむかつて話しはじめたのだ。そうかと思うと、女が自分の意のままにならぬからといって、剣で脅迫をする。要するに、ふだんよりも勇ましいところを女に見せつける。

ところが、フルウィアのほうは、クリウスがふだんとちがう態度をとつた原因をつきとめると、わが国家に迫っている由々しい危険を、いつまでも内緒にしておくようなことは、さすがにやらなかった。逆に、カティリーナの陰謀にかんして、その情報源だけは伏せながら、自分が聞いた話を、自分が聞いたとおりに、かなりの人々に教えたのだ。おもしろいことがもつとになって、マールクス・トゥッリウス・キケローを執政官職につけるべきだ、という熱烈な与論の火の手があがってきた。

ちなみに、それまでは、大多数の貴族は、キケローにたいする嫉妬心を烈しく燃やしていたのだった。そして、キケローが、人物はどれほど拔群であろうと、「新人」のくせに執政官職にありつくなら、その地位の神聖が汚されることになる、というような妙な考えを持っていたのだ。けれども、こうして危険が迫ってくると、嫉妬と高慢とは、一応、政治の動きの表面から姿を消した。

二十四

こういう事態の結果、選挙集会が終つたあと執政官として公表されたのは、マールクス・トゥッリウスとガイウス・アントーニウスとであった。陰謀の一味は、この決定を聞くと、たちまち、激しい動揺を覚えた。けれども、カティリーナの狂乱は衰える様子がなかった。それどころか、日ごとに策動を拡大する。イタリア全土の要衝で戦備を整える。自分か仲間かの名義で借金をして手に入れた資金を、ファエストラエのまぢにいたマンリウスという男のもとへ輸送する。——のちほど軍事行動の指導的人物となつたのが、このマンリウスである。

さて、この時分になると、カティリーナは、あらゆる種類の人間を、手あたりしだい、自分の仲間に引き入れた、ということである。そのなかには、女性もかなりいた。彼女らは、最初のうちは、酬業にたずさわることによって、莫大な出費にも持ちこたえることができた。けれども、やがて、年増としあになつて、あがりのほうだけは限度に達してきただのに、浪費癖のほうは限度を知らぬようなありさまになると、ついに、巨大な借金をこしらえてしまうことになつたのだ。カティリーナは、この女性たちを使えば、都に住む奴隷どもを蜂起させたり、都に火を放つたりすることもできれば、彼女らの夫を、自分の味方にすることも殺すことも、自由にできるだろう、と考へていた。

二十五

そして、このような女性の一人が、男まさりの不敵な悪事をたびたび犯してきたセンプロニアであった。この女は、血筋にも容姿にも、さらに夫と子供にも、申しぶんのないほど恵まれていた。また、ギリシアとローマとの文学



に通じていた。豎琴を弾きながら歌つても、舞いを舞つても、まともな女に必要な以上の技巧をみせた。そのほか、享樂の手段となる素養を、いろいろと積んでいた。

さらに、彼女がつねづねなによりも馬鹿にしぎっていたのは、貞節の名譽であった。もちろん、彼女が大切にしなければならぬものが、自分の金銭のほうであつたか自分についての評判のほうであつたかは、当時でも、にわかには識別できなかつたことだろう。いずれにしても、欲情が燃えるあまり、男たちを求めればあいのほうが、男から求められるばあいよりも、多かつたのだ。

また、彼女は、信用を裏切つて借金返済の誓約を破つたり、暗殺団の一味にはいつたりしたことが、それまでにも、たびたびあつた。つまり、浪費と窮乏とのために、一気に悪の道へ落ちていったのだった。

それにしても、彼女の天性は、まことに素敵であつた。詩を作ることでもできたし、洒落を飛ばすこともできた。言葉使いをいとかかにすることも、あでやかにすることも、みだりにすることも、自由自在であつた。要するに、機知があふれ才気があふれた女だつた。

## 二十六

さて、カティリーナは、前述のような手筈を整えておいたうえで、なに食わぬ顔をして、翌年度の執政官職の立候補者として名乗り出た。ひとたび予定執政官となつたら、アントーニウスを思いのままに動かすのは容易だ、というのが、カティリーナの見通しであつた。

しかし、カティリーナは、依然として行動を自粛しなかつた。それどころか、あらゆる工夫を凝らして、キケロー

を不意に襲撃する用意を進めていた。

ところが、キケローのほうでも、巧妙な警戒策を抜かりなく立てていた。つまり、キケローは、執政官に執任するやいなや、少し前で名を挙げた例のクイントゥス・クリウスに、「多大の報酬をするから」と、フルウィアを通じて約束することによって、カティリーナの計画を内報させることに成功していた。さらにまた、自分の同僚であるアントニウスとは、自分の属州を譲渡してやろう、という契約を結ぶことによって、反国家的な思想には走らない、という決心を、この男に固めさせることができた。また、自分の身内や被保護民から成る護衛団を、人目に立たぬように、身辺に従えていた。

ついに選挙集会の日が来た。そして、カティリーナが立候補したことも、カティリーナが立てていたカンブス・マールティウスでの執政官襲撃計画も、失敗に帰した。つまり、カティリーナのひそかな策動は、惨憺たる屈辱的な結果に終わったのだ。これをみたカティリーナは、軍事行動に訴えて、最後の切札に万事を賭けてみよう、と決心した。

## 二十七

そこで、カティリーナは、ガイウス・マンリウスを、エトルリアのなかの、ファエスラエのまちを中心とする一帯へ、カメリヌム出身のセプティミウスという男を、ピーケヌム方面へ、ガイウス・ユリウスをアプーリアへ、それぞれ出發させた。その他、適材適所となるように工夫しながら、各地方へ指揮官を配備した。

同時に、ローマ市内でカティリーナは、一時に処理すべき多くの仕事に、躍起になる。執政官襲撃の網を張る。放火の手筈をする。武装した配下に重要地点を占拠させる。率先して武器を携行する。一同にも自分を見習うよう命令

する。不断の警戒心を抱いて戦闘準備の体勢を取れ、と、一同に訓示する。昼夜の別なく動きまわる。徹夜をする。不眠によっても労苦によっても、疲れの色をみせぬ。

しかし結局、策動を重ねても、所期の成果は得られなかった。そこで、あらためて、マールクス・ポルキウス・ラエカを煩わせて、陰謀のおもだった人物を、深夜に召集した。その席で、カティリーナは、一同の怠慢をいろいろ叱りつけたうえ、つぎのように言って内情の説明をおこなった――

「挙兵のために集めてある群集を指揮させるために、自分はマンリウスを先発させた。ほかにも、内戦ののろしをあげさせるためのいろいろな指導者を、それぞれの要衝へ送ってある。自分も、ぜひ、都を去って野戦の指揮を取りたいのだ。ただ、そのままに、キケローを打ちのめしておかねばならぬ。やつが、自分の計画の大きな邪魔者になっているからだ」

## 二十八

この話を聞くと、一座の恐怖や躊躇を尻目に、ガイウス・コルネリウスというローマの騎士が、一肌脱いでみよう、と申し立てた。続いて、元老院議員ルーキウス・ワルグンティエヌも、協力を申し立てた。その結果、計画がきまると、この二人は、さっそく当夜のうちに、武装した一団を率いて、暁天の挨拶のためと称してキケロー邸にはいり、その邸内で、油断しているキケローを不意に刺そう、ということになった。ところが、例のクリウスは、執政官の身辺に迫っている危険がただならぬ、ことを見てとると、至急フルウィアに連絡をつけて、計画されている策略を漏らした。その結果、さきの二人は、キケロー邸の門をくぐることを阻まれて、買ってでた一大犯行をしくじってしまった

のだ。

あたかもそのころ、エトルーリアでは、マンリウスが民衆に蜂起をけしかける。その民衆は、貧窮と、それから、自分らが受けた不正にたいする怒りとに駆られて、以前から革命を熱望していた。つまり、スッラによる独裁政治の犠牲となって、所有地をはじめとする全財産を失っていたのだった。マンリウスはさらに、その一帯に多数いた各種の盗賊にも働きかけた。また、スッラの政策によってこの地方に植民させられていた者の一部も、この動きに加わった。かつて大略奪をやったにもかかわらず、放蕩と享楽とに耽ったあげく、無一物になっていた連中が、それであった。

## 二十九

キケローは、以上の情勢について報告を受けると、災難が二面から迫っていることに深い衝撃を覚えた。じじつ、キケローが一人だけで知恵を絞っていても、都をこれ以上謀略の手から守ることは不可能であったし、他方また、マンリウスが指揮している軍隊の勢力についても、その作戦計画についても、キケローは、十分なだけの確証を握ってはいなかった。そこで、まえからその風評をきいて世間が騒ぎだてはじめていたこの情勢を、キケローは元老院会議で正式に報告した。その結果、重大事件発生のさいの慣例にしたがって、「国家にいかなる危害も及ぶことのないよう、両執政官は尽力すべし」と、元老院は議決した。

このような議決にもとづく執政官の権限は、元老院がローマの伝統に従って政務官に付与する権限としては、もっとも強力なものである。つまり、軍隊を編成すること、戦争を遂行すること、ローマの同盟市およびローマ市民をあ

らゆる面で規制すること、首都の内部と戦鬪地帯とにおいて、絶対的な軍事・行政権と裁判権とを揮うこと——これらが、その権限の内容である。もちろん、平時なら、国民の命令がないかぎり、これらのいずれをおこなう権利も、執政官には与えられていない。

### 三十

さて、この議決があつて数日たったとき、元老院会議の席で、元老院議員ルーキウス・サエニウスは、ファエストラエから一通の手紙が自分に届けられた、と付言して、その文章を朗読した。それは、ガイウス・マンリウスが、十月二十七日に、大勢の群衆を率いて挙兵したことを、した認めた手紙であつた。

そればかりか、こういう事態にさいしていつも起こることであるが、各地での不吉なきざしやただならぬ前触れが、しきりに報告されてきた。同時にまた、種々の集団の結成や、武器のあわただしい輸送や、カプアのまちとかアーブーリア地方での奴隷の反乱の勃発なども、報告されてきた。

こういう事態に至つたため、元老院の議決によつて、クイントゥス・マルキウス・レークスがファエストラエへ、クイントゥス・メテッルス・クレイティクスがアーブーリアとその地域の周辺へ、それぞれ派遣された。——この二人の将軍は、以前、凱旋式の挙行を差し止められて、いつまでも「首都圏外待機中の軍指令官」という扱いを受けていたのだつた。つまり、二人は、徳行の表彰であろうと醜行の赦免であろうと、万事を金銭受領の代償にすることを常識としていた少数支配者の、策謀にかかったのである。——

さらに、法務官のうちでは、クイントゥス・ポンペイユス・ルーフスがカプアへ、クイントゥス・メテッルス・ケ

レルがピーケーヌム方面へ、それぞれ派遣された。そのさい、二人には、「状況に応じ、かつ、危険に対処できるよ  
う、軍隊を適切に編成してよい」という許可が与えられた。

以上の処置に加えて、つぎのような議決が発表された。「このたびの反国家的陰謀にかんして内報する者がたば  
あい、その者が奴隸なら、奴隸身分からの解放と金十萬セステルティウスとを、その者が自由人なら、陰謀加担罪  
の免除と金二十萬セステルティウスとを、褒美として与える」

決議事項はまだあった。「劔闘士の集団を、カプアその他の自治市へ、各市の資力を勸案して、分散せよ。また、  
ローマでは、全市域にわたって、下位政務官の監督下に、夜間警戒を実施せよ」

## 三十一

こういう事態になったため、ローマの住民は、たちまち、激しい動搖に陥った。そして、都の様相は一変した。長  
年にわたる泰平の恵みで陽氣と浮薄とのかぎりをつくしていた全市民のうえに、突然、暗胆とした空氣がひろがった  
のだ。——どこへ行っても、あわただしい。だれもみな、うろたえる。どんな組織にも、どんな人間にも、深い信頼  
は寄せられなくなる。めいめい勝手に、自分が感じる恐怖の強さだけを基準にして、危険の程度をおしはかる。それ  
だけではなかった。戦争に恐怖を覚えねばならぬような機会を、強い国力のおかげで長年のあいだ忘れていた婦人た  
ちが、ひどい不安に陥ったのだ。そして天にむかって嘆願の手をさしのべる。いたいけな子供たちのことを嘆く。根  
掘り葉掘り情況をたずねる。万事に驚愕する。以前の取り澄ました態度や色氣が消えうせたのはもちろん、自信も祖  
国への信頼も失う。

けれども、カティリーナのほうは、そんなことに情けをかけるような人間ではなかった。だから、当初の計画を着と進めていったのだ。警戒対策が進められていたことにも、プラウティウス法にもとづいてルーキウス・パウルスから罪を問われるところまで追いこまれていたことにも、カティリーナは平気であった。

ついに、カティリーナは陰謀の偽装をしようと思って、また、自分の無実の弁解でもできると思っていたのか、元老院会議の席へ姿を現わした。そして、自分はたんに喧嘩を売られた者にすぎないのだ、という態度をちらつかせた。<sup>\*</sup>

すると、執政官のマルクス・トゥッリウスは、カティリーナが目の前に来たことに恐怖を覚えたためであろうか、あるいは、怒りに逆上したためであろうか、ともかく、目もさめるように美事で、いちじるしく国家のためになるような演説をおこなった。のちに著作のかたちでキケローが公刊した例の演説が、それである。

さて、演説を終えたキケローが着席すると、カティリーナは、万事を偽装する計画をはじめから立てていたので、うなだれながら、訴えるような声色を使って、一同に、つぎのような頼みの言葉を述べ始めた――

「元老院議員各位。私にかんするご判断は、くれぐれも慎重におくだけいただきたいのであります。たしかに、これは自分が生まれおちた家系と、自分が幼いころから心掛けてきた生活態度とのおかけなのであります。私が、私は、将来のことで、いささかの邪心も抱いてはおりません。私は伝統ある国父階級の一員なのであります。私の祖先はもちろん、私自身も、ローマの民衆のために非常な奉仕をしてきた者なのであります。その私が、こともあろうに、国家の滅亡を望んでいて、生粋のローマ市民ではないマルクス・トゥッリウスのほうが救国者である、などとは、お考えになりませぬよう」

カティリーナが、こういう言葉に続けて、キケローにたいする悪口をまくいたで、始めると、全員は、非難の声を張

りあげて、カティリーナを大逆無道の国賊と呼ぶ。すると、カティリーナは、たけり狂って言った――

「私は、敵意ある連中から包囲されて、窮地へ追い落とされようとしている以上、からだに付いた火を消すために、国家と心中するつもりだ」

\* Jacobs-Wirz-Kurfess と Merivale とに従って sicuti(i) と読む。

### 三十二

カティリーナは、こう言い捨ててから、元老院議事堂を飛び出して、自宅へ駆けもどった。帰ると、ひとりであると思うにめぐらした。「執政官にたいする襲撃計画も、思うように進まない。また、放火をしようにも、夜警が都を固めていることは、あのとおり明白だし……」そしてついに、「軍隊を増強し、敵が新しい軍団を編成しえないうちに先手を取って戦備を整えるのが、最善の方策だ」と確信するにいたった。そこで、カティリーナは、夜が更けると、少数の部下を引きつれ、マンリウスの指揮下にある陣営を目指して出発した。

しかし同時に、カティリーナは、ケテグスやレントゥルスをはじめ、不敵な行動に恐れを知らぬ者であることを見抜いておいた連中には、つぎのような指令を与えた――

「あらゆる方法を用いて、味方の戦力を強化せよ。執政官にたいする襲撃計画を早急に実行せよ。殺戮や放火をはじめ、戦時に特有の暴力行為を準備せよ」さらに、自分自身も、近々、大軍を率いて都へ攻めのぼることになっている旨、附言した。

さて、ローマの情勢が以上のように進行していたころ、ガイユス・マンリウスは、使節を自分の部隊のなかから



選んで、マルキウス・レークスのもとへ派遣した。この使節には、つぎのような書信を携行させた――

### 三十三

#### 「最高指揮官殿

神々にも全人類にも誓って、以下のとおりに明言いたしますが、私どもは、武器を取って立ちあがってはおりません。ものの、祖国に反旗をひるがえしているではありません。社会に危険を及ぼそうという意図も、私どもにはありません。ただ、わが身を暴虐から守ることだけが、私どもの目的なのであります。まことに、この私どもは、高利貸の残忍な仕打ちを受けたために、悲惨な貧窮者になってしまったのであります。しかも、私どもの大部分は祖国を追われ、<sup>\*</sup>私どもの全員は体面と財産とを奪われているのであります。ですから、父祖の習慣に従って法の庇護を受けることを許された者は、私どものうちに、一人もおりませぬ。いや、私どもはすべて、祖先の財産を失ったばかりか、自分一人の身体の自由をさえ、維持することを許されなかったのであります。高利貸と法務官との狂暴は、これほどです。さ、ま、い、い、ものであります。

さて、みなさまのご先祖は、ローマの民衆に憐みをおかけになり、自発的に決議をなさって、民衆の窮状に援助の手をさしのべられたことが、たびたびございました。たとえば、現代のなまなましい出来事を挙げますなら、民衆の借財が多額になってきたため、見識あるかたがたの総意にもとづき、銀貨一枚にたいして銅貨一枚の割で、借金の返済が許されたこともございます。

また、一般に民衆というものは、支配欲に駆られたり政務官の横暴に激昂したりして、武器を取り国父階級に背い

たことが、たびたびございました。けれども、この私どもは、支配権も富も求めてはおりませぬ。つまり、世間でも戦争や争いのたねになっているものには、私どもは関心がないのであります。私どもが求めているものは、ひとえに自由なのであります。たしかに、およそ立派な人間からは、その生命を同時に奪わなければ、その自由を奪うことはできないのであります。

こういうわけで、私どもは、貴殿にも元老院にも、以下の請願をいたす次第であります。つまり、この悲惨な市民どものために、ご配慮を賜りますよう。法律の保護を受ける権利を、法務官は私どもから不当にも剥奪いたしました。この権利を復活していただきますよう。そして、私どもを窮地へ追いこむことは、控えていただきますよう。私どもとしては、身の破滅が迫るようなことになれば、自分らの流血にたいして最大の復讐をおこなうための手段を、工夫しなければならなりませんゆえ」

\* Jacobs-Wirz-Kurfess に従って patria, sed と読む。

三十四

この申し入れにたいして、クイントゥス・マルキウスはつぎのように返答した。「諸君は、元老院にたいして要求事項があるのなら、武器を捨てよ。そのうえで、ローマへおもむいて嘆願をせよ。わがローマの元老院は、古来、寛容と慈愛とをむねとしており、いかなる者から援助の要求を受けたときにも、かならず誠意をつくしてきたのだから」

ところで、カティリーナはいえ、都を去っていく道中で、大多数の元執政官たちへはもちろん、貴族の各重鎮へ宛てて、つぎのような手紙を送った。「私は、根拠のない中傷をうけて、苦境に陥ってしまったのであります。こ

れは、敵意ある連中が結託して作った勢力に、私がうまく対抗できなかったからであります。そこで、私は運命に従うつもりであります。そして、現在マッシリアへ亡命するための旅を続けているのであります。とは申せ、連中が言うような大それた犯罪は、私の身に覚えがありません。私は、ただ、わが国家の平穩を願うばかりなのであります。また、私が事を構えることによって騒乱が発生するようなことになるのを、恐れているだけなのであります」

ところが、この文面といちじるしく異った趣旨の手紙を、クイントゥス・カトゥルスは元老院會議の席で朗読した。カトゥルスの報告によると、当人へ宛てて、その手紙がカティリーナのもとから届けられたというのである。この手紙の写しを、以下に書きとどめておこう。

### 三十五

「クイントゥス・カトゥルス様

ルーキウス・カティリーナより

貴殿の抜群のご誠実は、すでに事実によって証明されております。ことに、先般、私の一身に重大な危険が迫りましたおりに、そのお心は身にしてみてもかたじけのないものでございました。ただいま貴殿にお願いの手紙をさしあげるにあたって信頼をお寄せできるのも、そのお心のおかげであります。従いまして、私は、変革を企てるにあたり、公式の弁明は用意しないつもりであります。ただ、悪事に身の覚えがないことに力を得て、内々の釈明を貴殿に打ち明けることに決心した次第であります。ですから、以下の言葉が神かけて真実であることを、お認めくだされば幸いです。

つまり、私は、努力と精励との結実を阻まれ、そのうえ、高い地位に相応した特権を保持できなくなっていたのでありますが、こういう不正と侮辱とを浴びせられて、怒りに燃えているのであります。そこで、私は、自分の主義に則り、不運な者を守るための政治行動に踏みきったのであります。もちろん、そうは申しませんが、私名義の借金の返済に当てうる財産を、私が持っていないというのではありません。早い話が、愚妻オレスティッラは、気前のよい女でありますから、他人名義の借金でも、自分と娘との資産を投じて皆済してくれるはずであります。私が申したいのは、官位に恵まれている高官どもが、私の見るところでは不適格者であること、ならびに、この私が、自分の確信するところでは根拠のない嫌疑による排斥をうけていること、この二つなのであります。

以上のような大義名分があります以上、かつての自分の高い地位の残された威力を保全しようと志して私が選んだ方途は、わが身の零落のわりには、けっして徳義を欠いたものにはなっていないのであります。

この手紙に認めたいことは以上では尽きないのでありますが、私にたいする暴力計画が進められている、との報告がはいってきました。この事態となりましたので、オレスティッラをよろしくお願いいたします。すなわち、その庇護を貴殿にご一任いたします。なにとぞ、愚妻が暴虐をうけませぬよう、お守りください。これは、貴殿のお子さまがたからのお願いに等しい、と、お考えください。では、お大切に」

## 三十六

それはそうと、アッレーティウムの近郊へ着いた当のカティリーナは、同地にいたガイウス・フラーミニウスのもとに数日間だけ足をとどめ、そのあいだに、あらかじめ扇動しておいたその一帯の住民を、武装した兵力に仕立て

あげた。そのうえで、執政官の権標をはじめ、軍事指揮権の保有を表わすさまざまな記章で身辺を飾って、マンリウスが守る陣営へ急行した。

ローマでこの事実の確証が得られると、元老院は、カティリーナとマンリウスとを国賊とみなす、と宣言し、その一党に属する残余の者にむかつては、期限を指定して、「それ以前に武器を捨てれば、死刑の宣告をうけている者どもを除き、罰を特別に免除する」と言って呼びかける。さらに、つぎのような元老院議決がおこなわれる。「両執政官は兵を募るべし。アントーニウスは軍隊を率いてカティリーナ追討を急ぐべし。キケローは首都を守護すべし」

ところで、この時点でのローマ国家の政治的統制力ほど、私の知るかぎり、惨憺きわまりないものはなかったのだ。つまり、日の昇る地方から沈む地方にかけて、一面にわたり、ローマの武威に靡くなま属国ができていたというのに、また、本国でも、泰平と富とが、つまり人間どもから最高の宝と思われているものが、溢れていたというのに、なんたることか。自己と国家との破壊のために頑迷な努力を傾けているような市民たちがいたとは。いやたしかに、元老院がすでに前後二度も議決をくだしていたのに、あれほど多数の悪党どものなかから、褒美に釣られて陰謀を裏切るような者は出なかった。カティリーナの陣中からは、万人に一人の離脱者も出なかった。——このとおり、伝染病にも似た\*、手の施しようもないほどの病的な悪風に、大部分の市民の心は染まっていたのだ。

\* Jacobs-Wirz-Kurfess に従って *atque uti* と読む。

(未完)